

「国語」の力を育む IT の活用

ーデジタルコンテンツを活用した授業実践ー

愛媛県松山市立味酒小学校 教諭 石田年保

キーワード：小学校、4年生、国語、デジタルコンテンツ、PDP式電子情報ボード

1. 授業実践の概要

「教育の情報化」政策のもと、2005年を目標に普通教室でのICT環境整備が進んでいる。今後は、ITを活用した特別な授業のための整備ではなく、日々の授業を支える基本的学習環境の整備がより強く求められよう。そうした状況を受け、光村図書では、2005年度以降に使用される小学校国語科用検定教科書のデジタル化を進め、普通教室での活用を想定したデジタルコンテンツ「提示型教授用ソフトウェア」を開発した。

本実践では、デジタルコンテンツや提示する装置「電子情報ボード」の普通教室での有効的な活用について報告する。

1.1 単元名の概要

教科	国語		
単元名	「伝え合う」ということ（光村図書）	指導計画	16時間（本時その1）
	※平成17年度版の教科書を使用した。		
実施学年	第4学年		
授業実施日	平成16年9月16日（月）	実施場所	普通教室

1.2 単元のねらい及び授業の概要について

本単元は、指導要領の指導内容A「話すこと・聞くこと」をおもなねらいとした学習単元である。本授業は本単元の第1時（単元の導入）にあたり、単元全体を通した児童の学習課題および学習意欲をもたせることをねらいとした。

1.3 実践授業で活用したコンテンツ及び機器について

(1) 「デジタル教科書」(光村図書)

デジタル教科書に以下のような機能やコンテンツが準備されている。

- ・教科書本文や挿絵の拡大提示
- ・教科書本文の朗読機能
- ・各単元に関連する動画や静止画のほか、学習指導書に対応した教材やワークシート、発展学習の教材などの収録
- ・新出漢字の筆順をアニメーションで表示

(2) PDP式電子情報ボード (Pioneer)



<写真1>
<PDP式電子情報ボードで「デジタル教科書」を表示しているところ>

2. 実際の授業の様子

本授業では、生活で使われている「伝え合う」方法について考えさせ、「手と心で読む」ということはどういうことかを予想させながら、点字に対する興味関心を高めていった。

次に、写真2の点字の静止画を提示し、気がついたことを話し合わせると、点字が規則性をもった「文字」であり、また、身の回りにたくさんあるという意識をもたせることができた。

さらに、市政情報を点字訳した資料と点字の50音表を配布し、点字を読む体験をさせた。本物の点字に触れ、手で読むことの難しさを体験させる中で、「目の不自由な人はどのように点字を読んでいるのか？」という疑問が児童の中に芽生えてきた。

そこで、児童に目の不自由な人がどのくらいの速さで点字を読むのか予想させた後、動画クリップ「点字を読んでいる様子」を見せた。その際、観察すべき点を明確にするために、最初は音声を消し、指の動きに注目させるようにした。その後、音声を入れて実際に音読をしている声を聞きながらその様子を観察させた。児童は自分たちの予想とは違い、目で読むのと変わらないスピードで点字を読み取っていく姿に驚きの表情を見せた。また、映像から右手と左手の指の使い方やどうやってその技能を習得した



<写真2>



<写真3>

のかなど点字を使う「人」に興味をもち、資料「手と心で読む」にはどのようなことが書かれているのかという教材文の内容に興味が高まった。(写真3)

資料「手と心で読む」は「デジタル教科書」で教科書の本文を拡大表示し(写真1)、教師が読み聞かせを行った。教科書の挿絵を拡大表示したり、重要語句にラインを引いたりして児童がイメージを広げたり、内容の理解が深められたりするようにした。特に挿絵から児童は自分の生活を振り返り、生活の中で点字の使われ方に関して多くの意見を交流することができた。また、児童の感想にも見られるように、多くの児童が点字を使う人に対しても目を向け、自分と点字のかかわりについて考えることができていた。(資料1)

なすま分をくとく目伝れ入自意をっ
あごした伝て思めのわばっ分し人た私
といたちえもいを不つ大てはがにこが
と思力とら、まは自て丈し目がすに伝と、
いまの違る字たしなまとつ見えたい。「本
ました。のうことので。て人しいうたえい。「自分
る人自自由な人が、分はんだめ点持、世界
んはかこのえなの字ち頑界
だ、り自とな、やはが張

<資料1>



<写真4>

2.1 IT活用の効果について

(1) デジタル教科書について

今回の実践では「デジタル教科書」のよさとして、以下の2点が考えられる。

1点目は、教科書本文を拡大表示できることである。拡大表示することにより、本文が読み易くなり、記号や文字を記入して視覚に訴えながら考えを深めることができたので、従来の授業のスタイルと比べ、集中して内容を深めることができたのではないかと考える。

2点目は、豊富な補助資料が用意されており、教師の指導意図に沿った活用ができるという点である。(写真4)

(2) PDP式電子情報ボードについて

PDP式電子情報ボードのよさとして、タッチパネル式になっており、スムーズな操作が行えることである。従来の、プロジェクターによる提示では、パソコンと提示画面に距離ができ、画面とパソコンを操作する教師に距離感があった。しかし、提示している画面で説明ができるので、説明や指示のとき、児童の意識を集中させることができた。

(3) 電子情報ボードの問題点

電子情報ボードの価格が非常に高く、現状としては各学校への普及率はまだ低い。今後、普及率を高め、どの学級でも活用できる環境を実現させるためにも、国レベルでの計画的な整備を進めていく必要性を感じる。

2.2 実施した授業におけるねらいと評価

(1) 実施前のねらい

①関心・意欲・態度(◎) ②思考・判断(○) ③技能・表現() ④知識・理解(○)

(2) 実施後の評価

①関心・意欲・態度(◎) ②思考・判断(○) ③技能・表現() ④知識・理解(○)

2.3 授業を実施しての所感

IT機器は、「便利」だから、「おもしろそう」だから使ったらいいというものではなく、やはり教科のねらいを達成するために活用しなくてはならない。その点では、従来の教科指導の延長線上にIT機器の活用があると感じた。

今回の実践で、デジタルコンテンツは、児童の体験した感動を大きくしたり、経験を想起させたりするために特に有効であることが分かった。しかし、体験や経験があったからこそ、デジタルコンテンツの効果を大きくしたとも考えられる。このことから、デジタルコンテンツを活用し授業をを組み立てていく場合、デジタルコンテンツと体験活動を融合させた授業の仕掛けを考えていくことが、学習への意欲を高め、理解を深めていく上で重要になると考える。また、ディスプレイに教科書本文を拡大提示することにより、視覚を通して考えを深めることができたので、教材文だけの読み取りと比べて、教材文のイメージをより広げることができる要因になったと考える。

本単元を実施し終えての感想に「国語が好きになった。」という児童の記述があった。これまで国語に余り興味を示さなかった児童ではあるが、ITを教科のねらいにそって、有効に活用していくことによって、より分かる授業が展開でき、児童の学習に対する意欲を高めたものと実感することができた。